慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	埃及學の創立
Sub Title	
Author	間崎, 万里(Masaki, Masato)
Publisher	三田史学会
Publication year	1922
Jtitle	史学 Vol.1, No.4 (1922. 8) ,p.105(583)- 115(593)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19220800-0105

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

埃及學の創立

一

上古の埃及に於ける、言語、歴史、古物の研究を總稱して埃及學（エジプトロジー）と言つてゐる。恰もアッシリヤ學、支那學などと言ふが如き意味の學問である。佛人シャンポリオンが、一八二二年、埃及文字の解讀に成功してより、本年は正に一百年となるので、記念の祝典は各地に擧げられんとしてゐる。この機會に際して、埃及學の勃興について、概觀を試みるものも、あながち、無意味ではないであらう。

二

近世に於て、埃及の古物に歐洲の學者が注目するに至つたのは、第十六世紀の頃からであつて、一五二九年乃至八九年間には、埃及文字を解讀しようとするの試みをなす迄に至つたが、何れも成功しなかつた。次いで博學を以て聞ゆるジェズイット宗の教父キルヘル(1)が出でゝ、本問題の研究に着手し埃及文字(2)の解讀の鍵を得たりと號して、象形文字は神秘なる宗教上の奥義を傳授するための一種の象徴であると主張した。このやうな謬説が本學の進歩に寄與する處のないのは勿論であるが、多藝多才なる彼が象形文字の正文に對して試みた奇怪なる反譯も、なほ埃及の古物に興味を起させるだけの効があつた。そして後日、埃及文字

註一、Egyptology といふ用語が流行するに至つたのは、一八四二年乃至五年間のことである。(Harmsworth's Universal Encyclopedia, vol. 23., 1922; P. 2329)

研究の手段となつたコプト語(3)を歐洲に移入したのも彼であつた。其著『コプト語文法書』(4)は、この言語に關して歐洲の學者の公刊せる著述の初であつて、久しくこの方面に於ける一切の研究の基礎となつた。其後、幾多の人士が、コプト語の研究及び埃及古物の研究に參與したのであるが、象形文字の解讀は第十八世紀の終末に至るまで、殆んど進歩の見るべきものがなかつた。然るに上記のキルヘルの僻說は漸次に信用を失なひ、象形文字の碑銘は上古埃及人の通用語を刻記せるものであると言ふ說が勢ひを得た。獨逸のロストックの敎授チヒセン（Tychsen, 1734-1815）は、埃及文字を綿密に研究して、或る文字は單に言葉の意味を決定するに過ぎないこと、而して丁抹の博學なるコプト語學者のツォエガ(5)は、この文字の一部は少なくとも純然たる音字であること、楕圓環(5)內に包擁されてゐる一團の符號は王名を示してゐるに相違なきことを初めて（一七九七年）指摘した。然るに當時本問題について知れてゐたのは事實上これ丈けに止まつて、色々な空論が尙ほ盛んに行はれてゐた(6)。埃及學が第十九世紀に至つて遽に勃興するに至つたのは、一には言語學的研究の進歩、二には考古學的發掘の進歩によつてゞあつた。而して埃及文字の解讀に鍵を與へたものは、かの有名なロゼッタ石(7)であつた。

註一、Athanasius Kircher, 1601-1680. は、浩瀚なる書物を記して、其中に聖字碑銘と其解讀の鍵を見出したと號した。彼は深遠なる學識を有したるも、今日の學問より之を見れば、明かに詐欺師であると言はればならぬ。(E. A. Wallis Budge: The Mummy, 2nd ed., p. 124)

註二、埃及文字は中世以來久しく忘却されて、全く了解し難くなつてゐたもので、之には三種の書體がある。便宜上、之を聖字（Hieroglyphic）略字（Hieratic）俗字（Demotic）と假稱する、第一の聖字には記念碑用のものと、書記用のものとがあつて、前者は西紀第三世紀まで行はれ、後者は全期を通じて、特に宗敎用に、使用せられた。第二の略字は、聖字の行草體とも見るべきもので、第一王朝に於ても見出される。その最も普及したのは中王國に於てであつたが、時代により書體も色々であつて聖字の原形を窺ひ難いものもある。第三の俗字は略字の更に分岐したもので、商業隆盛期に入らんとする第二十六王朝

の頃より略字との間に明確な區別を生じたらしく、其後、略字はパピルス文書用の宗教上其他傳統的正文に殆んど限られたるも、俗字は一切の業務用は勿論、記錄用及び俗語の宗教用にも使用せられ、書體も色々に變遷したのである。象形文字は總體に縱にも横にも書かれ、前の場合には、人や鳥獸等の動物の顏面の向へる方向に從つて、右から左へ、或は逆に左から右へと讀んで行くのである。(The Encyclopedia Britanica, 11th., ed. 1910-11. Vol. 9, pp. 58-65)そして、記念碑上の聖字が解讀されて初めて埃及の歷史は明かとなるのである。

註三、Coptic は埃及文字の代りにギリシヤ文字を以て記され中世に於ては、普通に埃及語 (Egyptian) と稱せられたもので、(バッヂ、木乃伊、上掲一二三—四頁、及びバッヂ著述の Easy Lessons in Egyptian Hieroglyphics, London, 1899, pp 1-39. 後掲の書は Source Book in Anthropology, by A. L. Kroeber and T. T. Waterman, 1920, pp. 451-2 の引用に據る) 主に、キリスト教初期の埃及に於ける通用語であつて、第三世紀より恐らく第十世紀に及び、爰に至つてその文語としての發達がやんだに相違ないのである。(ブリタニカ、上掲第九卷、五九頁) この語名の起因となつた Coptos は上埃及に於ける Luxor を矩ること二十六哩半の下流、ナイル河右岸に於ける上古の都邑であつて、現今の Kuft の地である。

註四、書名は Lingua Aegyptiaca Restituta, Rome, 1643-44.

註五、Cartouches のこと。これは埃及の聖字の碑銘中によく見受ける楕圓形の枠であつて、神名王名等を包擁するものである。上記ツオエガ (Georg Zoega, 1755-1809) は之に王名が這入つてゐることを認めたるも、まだ何れの側が初であるかを知らなかつた。(ハームズワース、上掲、三九八三頁。)

註六、以上は、主として、The New International Encyclopedia, 2nd ed., 1915. Vol. VIII PP. 545-7 に據る。

註七、ロゼツタ石とは、ナポレオンの埃及遠征の際、一七九九年、佛軍の工兵士官ブサール (Boussard) 部下の兵士が、ナイル河の一支流ロゼツタ (Rosetta) 河口に於て、更に詳言すれば、ロゼツタ市卽ちラシツト (Rashid) 市の北方四哩なる St. Julien 要塞增築工事の際、偶然に見出されたもので、其名のよつて起る所であるが、一八〇一年、アレクサンドリヤ市の落城せる際、英軍の手に移り、今日は大英博物館の所藏に歸してゐる。(ブリタニカ上掲、第二十三卷、七三六頁 埃及文字解讀の用に供せられたのは、其の碑文の拓本であつて、ナポレオンの遠征記念と見るべき「埃及紀要」(Description d' l'Egypte, Paris, 1809-29) 本文十卷畫面十四卷の中に收められたもので

ある。本記念碑は、もと西紀前一九五年、埃及王プトレマイオス第五世（Ephiphanes）と王后クレオパトラの彰德碑として建てられたもので、黑色玄武岩の厚き扁板、殘存せる現形にて高さ三呎九吋幅二呎四吋半厚さ十一吋（バッヂ、木乃伊、上揭、一〇八頁、本誌口繪參照）三段三樣の字體を以て銘記されてゐる。卽ち下段は當時の官用語であつて、多數の人々に讀まれたギリシヤ語五十四行中段は埃及俗字三十二行、ギリシヤ語を解しないものに讀ませるためであつた。而して上段の最も神聖なる部分には埃及聖字が刻してあつて、上部と左右が缺け唯だ終末の十四行を存するのみ、而も一行として完全なる行は存しなかつた。然るにギリシヤ文字及び俗字の方は何れも缺けてはゐたが、先づ以て完全に近かつた。それ故初めて解讀の用に供せられたのはこの俗字の部分であつた。本項に關しては、同じ題目にてバッヂの著述「木乃伊」上揭（一〇八―一五三頁）中に細說されてゐる。其後ロゼッタ石の埃及聖字の殘欠は大部分一八九八年にデルタのダマンフルで發見され、現在カイロ博物館所藏の他の殘石に由て補はれることが出來た。

三

先づ第一に右の碑文の研究に着手したのは、フランスの著名なる西亞・埃及學者（オリエンタリスト）ド・サシー男(1)と同じく瑞典のオリエンタリストで、巴里大使館附であつたアッケルブラト(2)であつた。前者はギリシヤ文字と埃及俗字とを周密に比較して碑文中の俗字の固有名詞數個を辨別することを得た(1)。後者は右の固有名詞と其他の固有名詞中にある俗字の殆んどすべての發音を定め、且つコプト語の助をかりて、正文中の數語の意味を決定した(3)。是れ實に一八〇二年のことで、他方ではペルシヤ帝國の象形文字の碑文中、アケメネード朝の諸王名をゲッチンゲン大學の敎授グローテフェント（Grotefend, 1775-1-53）が、巧に推斷したる、考古學上の二重に記念すべき年である(3)。併し兩者は未だ聖字を解讀するには至らなかつたが、アッケルブラトの俗字解讀の効は決して輕視すべきでない。その公にせる俗字のアルファベットの大部分は、後日、ヤングとシャンポリオンの事實上(4)採用する所となつたのである。

更に研究の歩武を進めて成功の域に近づいたのは、光の波動說で名高いイギリスの物理學者、ヤ

ング博士(5)であつた。彼は多數碑銘及びパピルス文書の周密なる研究によつて、略字と俗字との差別を立て集團をなせる文字數個の意味を決定するを得たが、未だ個々の發音については知る所がなかつた。楕圓環中の集團は王名なりてふ前記ツォエガの推斷を利用して、一八一九年ロゼッタ碑銘中のプトレマイオスの名に相當する聖字を指摘し之を分析せんと試みた。彼はこの名詞を七個のアルファベット（Ptolmis）よりなれりとし、其中の三個（P、t、i）を正解し、殘りの四字中、O字を無音の限定符(determinative)であると見做し、l、m、s、を綴字符であると說明して、之をole, ma, os,と誤讀した。彼は又カルナークの聖字の碑文中にBerenicenの名を認め、其中のnの一字だけを正解した。而して其他の判讀は全く不成功に終つたので、彼の聖字解讀の效績は數個(6)のアルファベットの決定に限られてゐた(7)。佛の埃及學の泰斗マスペロー（G. Maspero）の言葉をかりて言へば、ヤングは目的地を遠くより望見し乍ら之に入り得なかつたのである。少數の聖字に正しき發音を認めたことの效はヤングに歸すべきも、埃及聖字の解讀と近代埃及學の建設はシャンポリオンの效績に歸せねばならぬ(8)。

註一、Sylvestre de Sacy (1753-1838) 其著 Lettre de Citoyen Chaptal sur l'inscription égyptienne du monument trouvé a Rosetta, Paris, 1802 の中に Ptolemy, Berenice, 及び Alexander に當る俗字の集團を指摘した、（國際新百科大辭典上掲及び、倫敦タイムズ文藝附錄、一九二二年二月二日號、六五頁）

註二、J. D. Akerblad(1763-1819)彼は俗字のアルファベット十五字、數字三個、並に語彙と名稱十九個を得、是等を綜合して其著 Lettre sur l'inscription égyptienne de Rosetta adressée au Citoyen S. de Sacy, Paris, 1802. 中に發表した。（同上）

註三、G. P. Gooch: Historians in the Nineteenth Century, 2nd. ed., 1913. P. 507 並に、タイムズ、上掲、六五頁

註四、ヤングの一八一八年に公にせる "Supposed Enchorial Alphabet" を、一八〇二年に公にせるアッケルブラトの上記『ド・サシーに寄する手紙』と比較すると、兩人のアルファベット中の十四字は同一であるにも拘はらず、ヤングはアッケルブラトの功を認めなかつたのである。更に、シャンポリオンが、一

八二二年の『ダシエーに寄する手紙』に於て公にせるアルファベットは之をアツケルブラトのそれに比するに、その十六字が同一であるのに、シャンポリオンも、やはりヤングと同じく、この事實を忘却せるかのやうである。（バッヂ、埃及文字入門、上掲引用書、（四五一―二頁）

註五、Dr. Thomas Young, 1773-1829.は、埃及の研究を初むるに先ち既に歐洲の學界に名聲を馳せてゐた。彼は嚴格なるクエーカー宗の家庭に生れ、夙にヘブライ語アラビヤ語を初めとし數ケ國語を學び、古典に精通し、數學や物理學に熟達したるも、一七九二年倫敦にて醫學の研究を初め、エヂンバラ、ゲッチンゲン等に學び、エヂンバラ在學中、既に眼球に關する重要なる研究により王立協會員 F.R.S.)に擧げられ、一七九九年倫敦に於て醫を開業し、一八〇一年Royal Institutionの物理學教授に任ぜられ、二年間に九十一回の講義を行なひ、光學の獨創的發見及び光線の波動說を組織立てた。翌年王立協會の外國書記官に昇任した、彼は醫師としては正直過ぎて患者を心服させると能はず十分の成功を收めなかつたやうであるが、婚姻の關係上馬鹿眞面目に本業に從事したのである。一八〇三年教職を辭し爾來二十年間醫業の傍、略名を以て醫術外の著述を公にした。彼が埃及研究に注意を向けたのは一八一四年滿四十一歳の時であつて、彼の論敵シャンポリオンの死せる年齡である。彼は同年五月公刊未刊の聖字略字のパピルスに註解を附して、其頃氏の友人の將來せる埃及の斷簡の寫を添へ、古學協會に送附した。彼は既に略字（俗字を含めて）聖字と同一の組織を有することを了解し、埃及語は爾餘の東邦語と違ひ別に獨立の解釋を必要とすと唱へて、この原理をロゼッタ石の碑文に適用して、其の研究を進め、埃及文を語に分ち、ギリシヤ語と符合させた。十一月上記の論文に右の兩文の推量讀の譯文を附加した。ヤングの確認文字はド・サシー、アツケルブラトに比して多からず且つ不十分でもあつたが、希・俗の語彙は八十六個となり、其大部分は正しかつた、併し讀み方は概して誤つてゐた。其後の研究の結果は、一八一九年『ブリタニカ第四、五、六版の附錄』として『埃及』の項にI、J、の略名にて執筆した。爰に彼は俗字聖字の概して發聲よりなれることを確め、多數の神名を區別し、頗る巧妙に寧ろ好運に既知のプトレマイオスの外に Berenice の楕圓環を合致させ、他の楕圓環は第十八王朝の Thuthmosis に相違ないと正しき提言をなし、又同音語の原理をも認識したのである。（タイムズ上掲六五頁）

註六、ヤングの聖字正讀の字數については、諸書の間に相違があつて、四個（國際新百科大辭典）或は五個（ゲーチ上掲四

九七頁）とするもの、更に六個（バッヂ、木乃伊、上掲、一四三頁）とするものもある。

註七、國際新百科大辭典、上掲

註八、グーチ、上掲

四

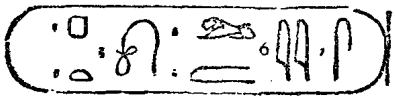
埃及學の開基シャンポリオン(1)はロゼッタ石の碑文の研究に取掛つて、あるパピルスには冒頭に宗教的光景が描かてゐる事、之が聖字の碑銘の上部にも存することに氣付き、其正文も亦同一であるかも知れぬといふ疑問を起して、聖字中の同一符號を拔萃し、一語も讀めないで、しかも、パピルスの文字が單に聖字の草體に過ぎざることを發見した。併しそれ丈けでは尙ほ前途遼遠の感はあつたが、ロゼッタ石の碑文より轉じて、俗字を檢討して固有名詞の Berenice, Alexander, Cleopatra を明かにし之にて十九字を得、俗字を讀み得るに至つた。それより聖字の研究に復歸して、先楕圓環中より發聲アルファベットを得たのである。

是より先き、シャンポリオンが埃及に關する處女作を公にしたのは一八一四年の事で其序文中に於て俗字とコプト語との間に於ける唯一の相違は字體の差に過ぎずと唱へ、ロゼッタ碑文中の埃及文字の解讀は殆んど完全に成功せりと聲明した。この陳述はド・サシー男の如き健實な學者をして彼を山師であると思はしめた位であつた。彼はアッケルブラトについて知らずといふも(3)其成果と彼の意見を善惡の分ちなく採用してゐる、而も殆んど彼以上に出づる點がなかつたやうである。彼は一八一九—二〇年『死者の書』中の略字と聖字とを詳細に檢討して一八二一年之を公にしたが、奇怪にも聖字は象徵的の働を爲し發音を示さずと誤り信ずるに至つた。ヤングのブリタニカの附錄が頒布されたのは丁度此時であつたので、以後のシャンポリオンの研究が該論文より大に暗示を得たのであるか否かについて喧しく論ぜらるゝに至つた(3)。ヤングは死するまでこの非難を加へてゐたが、シャンポリオンは飽くまで之を認めなかつた。彼が當初にこのやうなヒントを必要としたと否とを問はず、其後の研究は長き成功の歷史であつた。

要するに、シャンポリオンが、埃及文字を解讀するに至つた經路は次の如くである。ロゼッタ石は、前述の如く、破損してゐたので碑上に殘存せる唯一の固有名詞はプトレマイオスだけであつた。彼は一八一九年倫敦に將來されたオベリスク(4)の碑文について比較研究を試みた。之にはロゼッタ石の碑文と同一の聖字で楕圓環中にプトレマイオスの名を刻してあつた。その次のは女王の名があるべきであつた。この二つの名には聖字の比較をなし得る二三の共通の文字を含んでゐる。もし其中の同一の文字が同一の發音を有することが判明すれば之が純然たる音字であることが直ちに證明せられる。彼は從前の研究により、此二つの名が俗字に於ては同一の音字より成れることを知つてゐたので一般の比論よりして二個の聖字中の一致を豫想したのである。

さて、次に掲げたプトレマイオスとクレオパトラの聖字について之を解說せんに、

第一圖　Ptolemaios



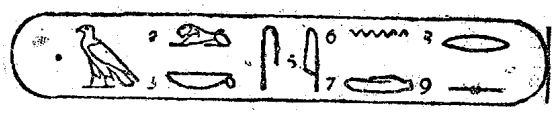
第二圖　Cleopatra

第二圖楕圓環中、Kを示すべき(1)は第一圖中に存せず。獅子の横臥せる(2)は第一圖中(四)と同じ、こは明かにLである。ペン形の(3)は短母音Eを示す、第一圖(六)は、このペン形の符號が重複してゐる、其位置から判ずるとaios中のAHであるに相違ない。(4)は第一圖の(三)と同じ、何れもOに違ひない。(5)は第一圖の(一)と同じ、こはPtolemaiosの首字であるからPでなくてはならぬ。(6)は第一圖中には存しないが、Kleopatraの終字なる(9)と同字であるから、Aであるに相違ない。(10)と(11)とは女性の固有名詞に伴ふ處の符號であつて、よく見受ける處である。手の形をした(7)はTに相違ない。之は第一圖中の(二)と合はないので一寸間誤ついたが、この差は同音語Tの第二形であるとして、容易に解決された。そして他の楕圓環中に於て、この兩符號は交互に用ひられてゐ

る。(8)はRに相違ない、この字は第一圖中には存しないが、ないのが寧ろ當然である。第一圖中の(7)はプトレマイオスの末字であるからSに相違ない。かやうにして、埃及アルファベット中の十二音十三字を得たのである。

更に『埃及紀要』中の一王名をとつて、之を讀んで見ると、

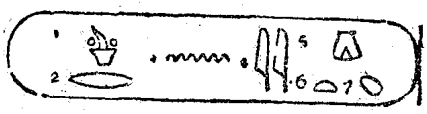
第三圖



圖中一、二、四、五、七、八、は第一、二圖より得たる知識によつて、AL…SE…TR となる。斯樣な順序で文字を並べたギリシャ王名はアレクサンダーだけである、故に三、六、九は、K、N、Sとせねばならぬ。之は他のパピルスを檢して確實に證明された。斯くしてアルファベットは十五字となつた。

更に他の女性の楕圓環を檢して見ると、第四圖中の二、三、四、六、七、は既知であるから……RNAI……となる。この順序の女性名は Berenice 一つ丈けであるが故に、一と五はBとKである。斯くして又二つの新字を加へた。斯樣な手續を反覆して終に埃及のアルファベットの大部分を解讀し得るに至つたのである(6)。

第四圖



かくして、神秘の幕は開かれた。聖字は義字ではなくてアルファベットであること、三體の文字は一つの體系をなせることを知つた。之によつて彼は埃及の諸王名と羅馬の征服者の名を讀み得るに至つた。爰に於てか、シャンポリオンは一八二二年九月二十九日、フランス學士會院に於て、有名なる Lettre à M. Dacier relative à l'Alphabet des Hiéroglyphes phonétiques を朗讀して、以上の研究を世に問ふたのである。併し彼の研究は異論なしには受容されなかつた。その效績に對する贊否の論は勃然として起つた(6)。Darmester は其の效績を賞揚してナポレオンの征服に比し、論敵ヤングは盛に攻擊の矢を放ちたるも、シャンポリオンはヤングのアルファベットが五字の外誤れることを指摘するに敢て困

難でなかつた。ド・サシー男はその門弟の勝利を祝したるも、Klaproth は彼が正文を誤讀せりとて盛んに非難を加へ、『斯樣な奇蹟を行なひ得るは人間の批判にあらず神の直觀のみ、然るに一學徒は僅か數年の中に、道理と常識の不可能を證する處、之を成就したりと信ぜよと言ふ』と。この冷笑的攻擊は却つて最高の讃辭となつた。彼の發見は人力を超越したるが如くであつた。實に我がシャンポリオンは近代世界に上古の埃及を回復したる功勞者中、最大にして最初の人であつた。

註一、Jean François Champollion-le-Jeune, 1790-1832. の傳は左の如し。彼は一七九〇年十二月二十三日、ロー縣フイジアック(Figeac)の書籍商の末子に生る。十二歳年長の家兄(Jacques Joseph Champollion-Figeac) と區別して le-Jeune と呼ぶ。父母なき後、教育其他に於て家兄の養育を受く。彼は幼少の頃より思を遠く埃及に馳す、恰もトロイに對するシユリーマン(Schliemann, 1822-90) の幼時に酷似してゐる。滿十一歳のとき、ナポレオンの埃及遠征に從軍せる醫師フリエ (Fourier)と親しみ、其の蒐集物に眼を曝し、好んで其の談話を傾聽した。滿十四歳のときコプト語文法書を手に入れ、未知の鍵ともならんかとも思つて、(而して彼はヤンゲに缺けてゐたコプト語の知識を有したる點は大に後日の研究に利した。)其の研究に耽り、一八〇七年にはグルノブルの學士會院にてコプト語は埃及の古語であることを朗讀し、次いで巴里に赴いて家兄の紹介にてド・サシー男に就てアラビヤ語ヘブライ語等を研究し、九年にはグルノブルなるリセーの歴史教授となり、一二年同大學の上古史教授となつた。こゝに初期の著述を公にす。家兄はナポレオン崇拜者、自己は自由の熱狂者なりし爲、種々の困難に出遭ひ、一八一六年には一時亡命して鄕里に逃れ小學教師を務めた事もあつたが、一七年グルノーブルに歸り學士院の司書となり二〇年に免ぜられた。聖字解讀の後佛國の考古學の進歩に寄與せる貴族達の盡力により少時の共和主義的過失を赦され、一八二六年には巴里に轉じて、埃及博物館の主事となつた。是より先き彼は王命を受けて伊太利各所の博物館を歴訪して、埃及古物の研究に從事し、一八二八年には再び命を受けて、等しくトスカナ大公の命を奉ぜし門弟ロセリニ (Ippolito Rosellini, 1800-43)と埃及に同行して共同研究をなし翌九年巴里に歸り、三〇年五月學士會員に擧げらる。三一年にはコレッヂ・ド・フランスに彼の爲に埃及學の講座が新に特設されたるも、惜哉、開講式の演說を試みたのみで、一八三二年三月三日中風を病んで死す。享年

滿四十一歳。其後家兄の手によりて出版された Monument de l'Egypte は彼の旅行の成果であつて、次いで Grammaire egyptienne, 1836-41. と Dictionnaire égyptien, 1841-45 とが遺稿として出版された。其の死後、後繼者其人を得ざりしため埃及學は一時頓挫を來たした。彼の傳を詳しく知りたい人は Hartleben 女史の苦心の作、二卷本の Champollion, sein Leben und sein Werk, 1906 を讀むがよい。

註二、L'Egypte sous les Pharaons. は百科辭書的計畫中の地理の部分をなす二卷本で古書及びコプト語文法書中の地名を論じたものである。

註三、彼がヤングの所說を知るや知らずやの論は兎も角、アツケルブラトの成果を知れることは確實である、又ヤングのロゼツタ石に關する論文がド・サシーを經て彼の手に入りたるとも疑を容れない。彼にしてもし之を許容したりとせばヤングの友輩は滿足したであらうし、又決して彼效績と光榮を減じはしまいに。(バッヂ、木乃伊上揭一三〇頁、入門、上揭四五二頁)

註四、このオベリスクは、バンクス (W. J. Bankes) が、一八一五年埃及フイレ (Philae) 島イシスの寺院を踏査中に發見せるものでプトレマイオス (Physcon) と兩クレオパトラとを表彰せるギリシヤ文の碑銘を刻してある臺石の傍に倒れてゐた、もと其臺上に建てられてゐたものらしく思はれる。之には四面に各一行宛の聖字が刻してあつた。シヤンポリオンはこの碑が臺石のギリシヤ文の記述の結果であるならば、必ず聖字の楕圓環內にはプトレマイオスの次ぎにクレオパトラの名があるに相違ないと斷定したのであつた。この碑は臺石と共に一八一九年 Belzoni が費用を投じて之をイギリスに移し、ドーセット州の Kingston Lacy バンクス公園に建てられて現存するも、風土の爲に文字が甚しく磨滅してゐる。此希埃二種の碑銘は一八二一年にバンクス之を石版に作り、二二年一月には巴里の學士會院にヤングの論文と共に送付せられ、之が直に Letronne に、更に、後者より當時巴里にあつたシヤンポリオンの手に傳はつたのである。そして彼は一八二二年三月號の Revue encyclopedique に論文を揭げて之が研究を發表した。

註五、バッヂ、上揭、一四四—七頁、Freasted: Ancient Times, 1916, Pp. 96.-7

註六、彼とヤングに對する是非の論爭は上揭のバッヂの著述中(木乃伊一四八—一五二頁)に一括して揭げてある。